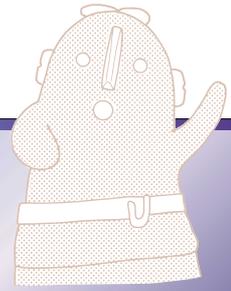


野原古墳群

～ 『踊る埴輪』を出土した古墳群～



はじめに

野原古墳群は、和田川に南面する江南台地上標高50m前後の平坦地に、前方後円墳1基と、22基の円墳が分布していることが確認されています（第1図）。

『踊る埴輪』を出土したことで知られる本古墳群は、1976年に埼玉県選定重要遺跡に指定されています。



野原古墳群出土「踊る埴輪」

遺跡の概要

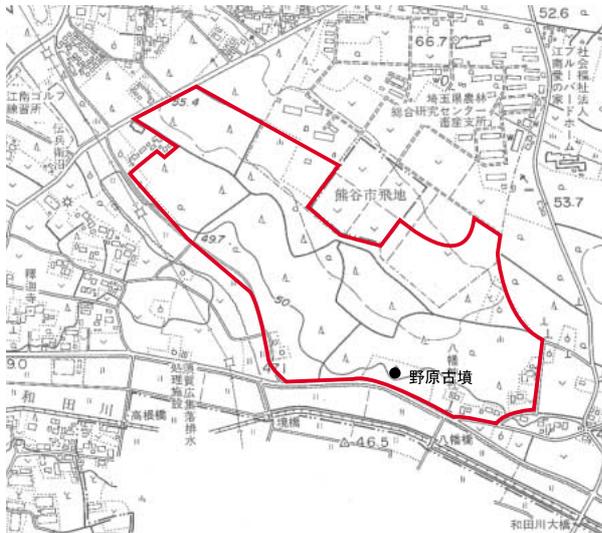
本古墳群の中で、『踊る埴輪』を出土した前方後円墳「野原古墳」が、1962年に採土工事に伴い、埼玉県教育委員会によって調査されています。

調査の結果、本古墳は、全長約40m、高さ約5m、後円部径約16mと計測され、横穴式の石室が、後円部と前方部の二箇所に確認されています（第2図）。出土品は、大刀・刀子・人物埴輪・馬形埴輪・大刀埴輪・朝顔形埴輪が出土しており、六世紀後半から末葉にかけての築造年代が推定されています。

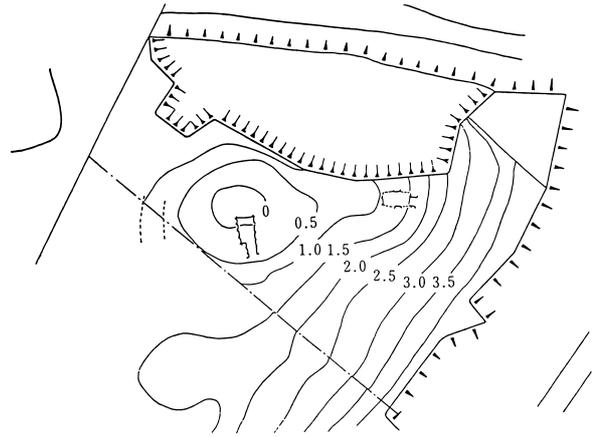
また、円墳群については、1964年に立正大学考古学研究室が8基の円墳を発掘調査しており、埴輪・土師器・須恵器・鉄鏃（鉄製の矢尻）・金環（金銅製の耳飾）・大刀・刀子等の遺物が出土しています。

『踊る埴輪』について

この埴輪は、1930年3月に江南町大字野原字宮脇107番地および同字境田24番地にかけて所在した前方後円墳より、畑の開墾中に発見されました。その後、1932年に東京帝室博物館（現東京国立博物館）が購入し、現在東京国立博物



第1図 遺跡の位置（1/20,000）



第2図 「野原古墳」測量図

館の平成館において常設展示されています。

円筒形の先を丸めた寸胴の一对からなるこの埴輪は、眼と口を丸く開け、一筋の粘土紐を貼付けて鼻をつくり、顔を表現しています。全身は大胆な省略法で素朴に表現されており、いかにもおどけた表情は大変親しみが感じられます。

いかにもリズムをとって踊っているように見えることから、東京帝室博物館の後藤守一氏によって『踊る男女像』と名づけられ、日本の埴輪を代表する優品として、歴史の教科書を始めとして、広く国外にまで知られるに至っています。

大きい方の埴輪は、高さ63.9cmを測り、顔の左右に小円をあけて耳を表現しています。

小さい方の埴輪は、高さ56.6cmを測り、頭部にふりわけ髪と顔の左右には蝶形の角髪を結び、左腰に紐を下げ、後腰には鎌を差しています。この、角髪を結っている小さい方の埴輪が「男性」と考えられています。

< 江南町教育委員会 >